

会員投稿欄

今月のテーマ..旅の思い出

濟州島 男二人旅

中島泰志

定年退職の時期が迫ったある日、ふと旅をしようと思いい立ちました。

目的地は韓国の濟州島、何となくHISのホームページを見ていて何となく決めてしまいました。連れは私の高校時代のからの友人の画家です。こういう時はフリーランスの友達は有り難い。この旅はパック旅行だったので総勢は30名位、殆どが女性のグループでおじさん2人組は奇異な目で見られました。濟州島は韓国のハワイと呼ばれるリゾート地、観光すべき名勝は沢山ありご紹介は割愛いたしますが素敵な処だらけでした。今でも同行の友人と想い出話に花が咲くことがあります。どんな話かは内緒ですが・・・想い出と言えば屋台で食べたトッポギとおでん。庶民の味はどこへ行っても美味でした。

岩稜登攀

佐藤次郎

北穂東稜を登ったのは40数年も前のことだ。なのに時折思い出すのは、それが自分の中ではちよつとした冒険だったからである。

北アルプス・穂高連峰。北穂高岳東稜は険しい岩稜だが、ザイルがなくても登れる程度の難しさだ。ただ、岩登りの経験がほとんどない、ただの山好き学生にとっては、いささか手にあまるルートではある。先輩が連れていってくれたのだが、振り返ってみると、よくそんなところへ行つたものだと思わないでもない。が、両側がすっぱり切れ落ちた岩稜を必死でたどつた記憶はあつても、怖いと思つた覚えはない。臆病なたちだが、その時は乾いた岩の感触を純粹に楽しんだのだろう。それが若さというものだなと、いまはちよつとの岩場でも足が震える身としてしみじみ思う。



サハラ砂漠

田中喜美子

ほんとの自然が見たい、手つかずの自然に触れたい、そんな思いから平成17年2月、アフリカ・チュニジアのツアーに参加した。現地のホテルへ着いた翌朝、私はひとりホテルから徒歩20分程のサハラ砂漠へ向つた。

そこには地球の丸さに沿って涯なく砂漠が広がっていた。手つかずの自然にたじろいだるが勇気を出して砂漠の一角に坐した。そして砂に触つた。掴んだ。でも砂は掴めども掴めどもさらさらさらさらと掌からこぼれ落ちる。掴みたい。掴めない。何十回それを繰り返したことか。からつぽの掌がふと言つた。「からつぽを掴んだよ」と。サハラ砂漠は私に「からつぽ」を掴ませてくれたのです。すくうようにして持ち帰つたサハラの砂は私の宝物となり、いま大理石の箱に収められています。



旅・こぼれ話

ヨツピ川という不思議な名前前の川をご存じですか？先日、編集子はあ・そうかい仲間4人で秋の尾瀬ヶ原を歩いてきました。写真はその時の一枚。ヨツピ川は尾瀬ヶ原を流れる小さな川の名ですが、多摩川などと同格の堂々たる一級河川。小さな吊り橋や、写真にある長さたつた12mの小さな木橋も架かつていたりします。ヨツピはアイヌ語で「呼び」「別れ」「集まる」などの意味だそうです。ちなみに一級河川とは国交省が指定・管理する川のことです。



十月初旬の湿原は視界いつぱいのセピア色が美しく、遠くの山の端には雲が湧き、池塘の向こうに白樺林、足元には可憐なリンドウが咲き・・・素敵な秋の一日でした。

季節のうた

伴せはここに

作詞・作曲

大橋節夫

秋の夜は更けて
すだく虫の音に
疲れた心いやす
わが家の窓辺
静かにほのぼのと
伴せはここに

星のまばたきは
心の安らぎ
明日の夢をはこぶ
やさし君が笑み
静かなわが窓辺
伴せはここに

静かに静かに
街の灯もきえた
遠い空見てごらん
明日の夢がある
小さな小さな
伴せはここに

編集後記

今号から通信編集室に力強いメンバーが加わりました。佐藤次郎さんです。何といつても佐藤さんは元プロの新聞記者。これほど強い味方はありません。みなさん今後のあ・そうかい通信に大いに期待してください。

みなさん、たまには @カラオケ はいかが？ 秋には秋の、冬には冬の歌、 いいものですよ、 ご一緒にどうぞ！